

「神の見えざる手」

京都府・同志社女子高等学校 1年 人見 陽子

数年前の夏の暑い日に見たある光景が、今も忘れられずに記憶に残っている。

つよい日差しに照らされて陽炎がゆれている通りの向こうから、ゆっくりとした速度で自転車がふらつきながら進んでくる。といっても、初めからそれが自転車だとわかっていただけではない。何かの金属の小さな塊がピラミッドのように積み上げられ、その下の方で車輪が回っているのが見え、それが私の方に向かって、近づいてくるのがわかっただけである。

私はなぜか、「ハウルの動く城」のようだと感じた。たぶん、姿形はそんなに似ていないのだけれど、不安定な、今にも倒れそうなたどたどしい動きがそう感じさせたのかもしれない。

徐々にその「動く城」との距離が縮まり、ようやくそれが、押しつぶした空き缶を前と後の荷台に山のように積み上げた自転車だということが理解できた。そして、同時にその自転車に乗っていた背の低い老人の顔が目に入った。その老人の顔は珈琲豆のように茶色く、深いしわが顔全体に刻まれている。日に焼けていることもあるのだろうが、長い時間を経て皮膚に染みついたよごれのようにも見える。そして、額やあごの先から落ちた汗が、黄色く変色したシャツや黒ずんだズボンを濡らしていた。

目が合った瞬間、何となく怖い感じがしてすぐに目をそらしてしまった。なぜなら、そのおじいさんの表情には、何ともいえないような

疲労感がにじんでいただけでなく、私の思い込みかもしれないが、瞳の奥に深い悲しみが感じられたからである。

あのおじいさんは、あれだけの量の空き缶を集めるのに、どれだけの時間が掛かり、どれだけの距離を移動したのだろうか。そして、あれだけの量の空き缶を売ることで、いったいどれほどの収入を得ることができるのだろうか。すれ違って、通り過ぎた後、しばらくそんなことばかり考えていた。

もちろん、その人の生活の実状を知っているわけではないし、先入観で判断するのは間違っていると思うけれど、決して経済的に恵まれた生活を送っているようには感じられない。というより、明らかに大変苦しい状態で日々を過ごしているように思われた。

見た目だけではわからないが、かなりの高齢であるように見え、何とかもっと楽な生活を送らせてあげることにはできないのだろうか、勝手なおせっかいかもかもしれないが考えてしまう。

ただ、あのおじいさんも、他人から同情や哀れみの目で見られることは望んでいないかもしれない。一人ひとりの暮らし方の良し悪しを、単に経済的に「恵まれている」か「恵まれていない」か、という基準だけで判断することはできないし、まして、人の「幸せ」とか「不幸せ」をそれで決めることはできないからである。

人々の生活には、その生活を選んだそれぞれ

れの原因があるだろう。暮らし方や働き方について、個人の選択が肯定されることに自由主義経済の良い点があることは、私もわかっているつもりだ。少なくとも、人生の送り方を誰かに強制されたり、管理されたりする社会に暮らしていないことの価値を大切に思うべきだし、そのような人間としての自由が尊重される社会を守らなければならないと思っている。

ただ、それでも、私たちの暮らしている社会が、より多くの人にとって少しでも経済的に恵まれ、豊かな生活の送れる社会であることを望むことは間違っていないはずである。どのような生活を選ぶかの社会的自由がある一方で、生活を選べるだけの経済的自由を得られていない人が多く存在しているのは否定できない。

そして、それを自由な競争の結果であり、仕方がないと片付けてしまっただけではいけないと思う。

しかし、そう思いながらも、私は、「神の見えざる手」という言葉が好きだ。

この言葉の意味を正しく理解できているかどうかは、正直に言ってあまり自信がないけれども、人間が自分の利益のために行動することは必ずしも悪いことではなく、そうした個々人の努力が社会全体の繁栄と調和をもたらすというアダム・スミスの考えは、21世紀の今でも決して古い考えだとは思わない。今よりも少しでも良い生活がしたいとか、経済的な自由を手に入れたいと願って努力する一人ひとりの思いが集まって、社会全体に活力が生まれ、経済的な繁栄につながっていくというのも事実だと思う。

でも、この「神の見えざる手」が、誰一人

として残さず、すべての人々の生活に平等に働いてくれるかどうかは別だと考える。

もし、本当に神が経済をコントロールしているのなら、確かに一度の過ちを犯すこともなく、すべての人々により良き生活を与えてくれるかもしれないが、現実がそうになっていないことは誰でも知っている。

最近特に、「格差社会」といった言葉がよく聞かれる。日本の社会は、経済先進国の中で最も経済的格差の小さい社会だといわれていたようだが、そうした実感が徐々に薄れてきたようにも思われ、将来どのような社会をめざすべきか、困難な選択を迫られている。

経済は神ではない。経済を支え、動かしているのは私たち人間であって、それが人間の営みである以上、過ちや迷いが生まれることは避けられない。したがって、完全な経済システムはないということを認めただけで、どうすれば社会全体を、そして一人ひとりの生活を自由で、より豊かにすることができるのかを考えることが必要だと思う。

ただ、社会がどうあるべきか、とか、経済システムがどうあるべきかを考えるときに、個人の記憶にしか残っていない一人の老人の姿だけを判断の材料にしてはいけないだろう。制度やシステムの問題を考えるときに感傷や気分にとらわれてはいけないことは、私にもわかる。

でも、経済が人を幸せにするためのシステムであるのなら、それを考えるときには、社会全体がバランスよく見渡す姿勢が大切であると同時に、一人ひとりの人間の心や表情から、決して目をそらさない姿勢も忘れてはならないだろう。